

13. ^{99m}Tc -ECD 脳血流 SPECT の検討— ^{99m}Tc -HMPAO との比較—

田所 匡典 玉木 繁 米澤 亮司
(刈谷総合病院・放)
伊藤 健吾 S. ガンビール 石垣 武男
(名大・放)
山下 雅人 青山 裕一 三島 厚
(同・放部)

脳神経疾患 15 例において同一条件下で ECD と HMPAO による脳血流 SPECT を行い比較検討した。800 MBq 静注後 20 分から撮影を行った。脳への集積は ECD が多い例、少ない例、同程度の例が混在し一定の傾向は見られなかった。脳集積と比較した脳外集積は全例で ECD が少なく鮮明な脳画像が得られた。病巣が検出された 10 例中 8 例で病巣/健常部コントラストは ECD が強く、2 例で差がなかった。標識に使用する ^{99m}Tc の制約が少なく、標識後安定であることに加え、病巣部のコントラストがよく、脳外集積の少ない鮮明な画像が得られることにより、 ^{99m}Tc -ECD はより日常臨床に適した脳血流 SPECT 用製剤と考えられる。

14. IMP-ARG 法, Table look up 法による局所脳血流測定—Xe 吸入法, IMP-Microsphere 法との比較検討—

外山 宏 竹下 元 柴田 香織
古賀 佑彦 (藤田保衛大・医・放)
江尻 和隆 前田 寿登 竹内 昭
(同・衛・診放技)
榎原 英二 竹内 由美 加藤 正基
(同・病院・放部)

ARG 法と Table look up 法, ^{133}Xe 吸入法, Microsphere 法の相関性, ARG 法の問題点について検討した。ARG 法 ($V_d=45$) と Table-look-up 法の相関は, $r=0.98$, ARG 法と Xe 吸入法の相関は $r=0.70$, ARG 法と Microsphere 法の相関は $r=0.91$ で、いずれも有意な正の相関を認めた。脳梗塞の 1 症例、AVM のダイアモックス負荷 1 症例に ARG 法と Microsphere 法に乖離を認めた。ARG 法は、簡便で正確な SPECT による脳血流定量法であり、ルーチンワークにおける有用性が期待できた。適切な標準入力関数、 V_d 値の設定、適応の限界についてさらに詳細な検討が必要であると考えられた。

15. ^{99m}Tc -HM-PAO Super Dynamic SPECT

—高血流病変の検討—

外山 宏 竹下 元 柴田 香織
古賀 佑彦 (藤田保衛大・医・放)
江尻 和隆 前田 寿登 竹内 昭
(同・衛・診放技)
榎原 英二 竹内 由美 加藤 正基
(同・病院・放部)

脳梗塞 4 症例に ^{99m}Tc -HM-PAO の静注後超早期ダイナミック SPECT (DY) とスタティック SPECT (ST) を施行し、亜急性期の病態解析を試みた。発症後 2 週間以内の症例は、DY, ST ともに梗塞巣に高集積を認めたが、発症後 2 週間から 1 か月の症例は、DY で低集積、ST で高集積を認めた。2 週間以内の高集積は、脳血管運動麻痺による高血流状態 (Lassen の提唱した Luxury Perfusion), 2 週間から 1 か月の ST の高集積は、肉芽組織、新生血管による水溶性代謝産物の蓄積で、DY の低集積は低血流状態を示していると考えられた。 ^{99m}Tc -HM-PAO の静注後超早期ダイナミック SPECT は、脳梗塞亜急性期の虚血と脳組織損傷の病態解析に有用と考えられた。

16. ^{123}I -MIBG による転移性カルシノイドの一例

渡辺 直人 吳 翼偉 濑戸 光
清水 正司 薮山 昌成 野村 邦紀
永吉 俊朗 神前 裕一 柿下 正雄
(富山医薬大・放)

症例は 77 歳女性で、主訴は腰痛である。全身倦怠感と腰痛が増悪し、近医受診中に肝機能障害指摘され当院入院となる。身体所見として、肝 2 横指触知し軽度の肝機能障害と便潜血陽性以外は特に異常所見は認めなかつた。肝障害のため CT を施行し、多発性肝腫瘍を認めた。便潜血のため、大腸ファイバーで直腸に腫瘍を認め生検にて直腸カルシノイドと診断された。腰痛精査のため骨スキャンを施行し、多発性骨転移の所見が得られた。以上直腸カルシノイド肝・骨転移と考え、 ^{123}I -MIBG を施行した。肝および骨転移病変に一致した異常集積を認めた。直腸腫瘍は、検出困難であった。 ^{123}I -MIBG はカルシノイドの診断精査には有用と考えられた。